シンポジウム「価値論争再考」
Reconsidering the value discussion in German philosophy and sociology

シンポジウムの趣旨説明

19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツを中心に展開された「価値論争」は、生の哲学、新カント学派、現象学を巻き込んだ哲学史上の大論争であっただけでなく、ウェーバーの「価値自由」概念に代表されるように社会学にも影響を及ぼした。しかし1930年代に新カント派が急速に衰退し、現象学がハイデガーによって存在論へと転回すると、（マルクス主義を別として）価値をめぐる哲学的議論も自然に終息してしまった。しかし近年、独・英米圏では「ハイデガー以前」の哲学者たち、すなわち新カント学派や初期現象学派、さらには現象学的社会学者（シュッツ・グルヴィッチ）の再評価がはじまっている。こうした近年の動向を踏まえて、本企画では、ニューヨーク工科大学ケリー教授にエトムント・フッサール、マックス・シェーラー、ニコライ・ハルトマンの現象学的価値論のアクチュアリティについて、また慶応大学シュトラスハイム講師にはシュッツの現象学的社会学における価値の問題について論じてもらう。（講演は英語ですが、翻訳原稿を配布いたします。また質疑応答には簡単な通訳もつきます）。

提題者紹介

Professor Dr. Eugene Kelly

講演題目：「実践知と実質的価値倫理学」

ニューヨーク大学にて博士号取得。ニューヨーク工科大学教授。American Philosophical Association’s Newsletter on Teaching編集委員。国際シェーラー学会理事。近著にMaterial Ethics of Value: Max Scheler and Nicolai Hartmann (Phaenomenologica 203, Springer, 2011)。“Max Scheler”(in: The Routledge Companion to Phenomenology, New York: Routledge, 2011)。またニコライ・ハルトマンの『美学』(Aesthetics, Berlin: De Gruyter, 2014)の英語翻訳も手がける。

Dr. Jan Strassheim

講演題目：「アルフレッド・シュッツと『見識ある市民がもつ』価値について」

ベルリン自由大学にて博士号取得。慶応大学非常勤講師、早稲田大学客員研究員。近著にSinn und Relevanz. Individuum, Interaktion und gemeinsame Welt als Dimensionen eines sozialen Zusammenhangs (Wiesbaden: VS Verlag 2015)、“The problem of ‘experiencing transcendence’ in symbols, everyday language and other persons.”(in: Schutzian Research 8, 2016)、また論集Relevance and Irrelevance. Theories, Factors and Challenges (Straßheim, Jan / Nasu, Hisashi (eds.) Berlin, Munich, Boston: De Gruyter 2018) を刊行予定。

企画担当：横山陸（社会学研究科博士課程在籍）